

緊急住宅会議 第1回会議 議事録

日 時：2014年1月10日 19:00～23:30

場 所：内野設計万代町事務所

仮設住宅

- ・ 東日本大震災後の仮設住宅5万棟のうち、5000棟が木造で建設された。
- ・ 材料さえ揃えば木造でも応急仮設住宅に対応できることがわかった。
- ・ プレ協プレファブは大量生産のラインがあり早い。木材をどう調達するかが最大の課題。
- ・ 福島での木造仮設はコンサルへの発注、コンペだったが、実際はJ I Aなど設計者達が黒子になってバックアップしていた。
- ・ 大規模なヤードでの建設はプレ協など大手が一気に、変形敷地狭小敷地の配置などは設計者の仕事、と、住み分けがすすんだ。
- ・ プレ協には企画部会と住宅部会がある。住宅部会のほうでは木造での対応もできる？
- ・ 徳島県は3.11後いち早く全木連と応急仮設住宅供給の協定を結んだ。
- ・ フレッセでは、全木協、全建総連と協力しながら東日本支援や応急仮設住宅の事前準備を進めている。
- ・ プレ協と大手の組み合わせでの応急仮設住宅は、地元にお金が落ちない。復興支援という視点ではやはり地域産材と地元労働力で対応できるようにしたい。
- ・ 大手が対応しにくい部分をすすんでやっていくことから。
- ・ 平野部の少ない徳島県南などでは、こまわりの効く地元工務店と設計者の組み合わせでないと対応しにくいはず。→事前の準備が必要。仮設ヤード候補地の設定、仮計画など。

福島での板倉仮設住宅

- ・ 20数年にわたり研究開発を続けてきた「板倉構法」。生材での失敗や試行錯誤で、乾燥した板の安定供給、つまり備蓄が条件になっていたことが、緊急時に活きた。
- ・ 阪神大震災で何も出来なかったという悔しさが東日本への力になっていた。
- ・ 福島での板倉の仮設は、福島材を使うという配慮も必要。構造材など外殻周りを地元材（4割）、内装を徳島からの乾燥板材（6割）を使用した。

木材

- ・ 徳島は元々柱用の小径材の出荷が少ない。
- ・ 徳島県の製材、50万立米のうち、県産材：20、外材：20、移入材：10。
- ・ 徳島県としては県産材の20を倍に、40に、という方向だった。柱は愛媛、高知、板と梁は県産材でというイメージだった。が、昨年からある業者が川上でとめてしまい、供給のしくみが破綻している。→消費税駆け込みという需要増に対応できていない。年末からの雪もあり、伐れない、出せないという状況も追い討ちをかけている。
- ・ 小松島に大製材工場が進出する。林業者はそこへ県産材を出すという協定を結んでいる。
- ・ 徳島は「板」でがんばってきた。薄板の製材技術と、日本一の雨量の木頭林業。
- ・ せき止めて、鉄砲水で流す流送技術。流送以前はトロの部分しか運べなかったが、流す

ようになって丸太ごと下ろせて、板で使い尽くし、さらに背板は燃料として高価で売れて、いわば「120%」売り切れ、徳島の林業は栄えた。

- ・ 台風の南風で材は北に寄るので、製材所は北岸に集中している。
- ・ 林業家は、流送流域で、障害になる岩を削ることまでした！
- ・ 荷揚げ場を流れ過ぎてしまった材を改修して売る商売があった。焼印部分をカットするので少々短い・・・。
- ・ 加工しづらい元玉材より二番玉三番玉が板材として重宝された。太いほど高価だったが、板が売れなくなり、その状況打破のためS B材が開発された。
- ・ 阿波水軍造船材
 - 「真木」：槻（つき、ケヤキの古名）、樅、榎、杉、桧
 - 「五木」：松、桐（くぬぎ）、杉、桧、楊梅（やまもも）
 - 「十二木」：杉、桧、槻（ケヤキ）、榎、樺、楠、柿、柀（トチ）、桐、桑、樗（カヤ）、朴（ホウ）

乾燥

- ・ 「木研」は2011のスタート。「木住協」には三十年の歴史がある。杉の家を人に勧めるためにはまず学ぶことから、と、研究、試験を続けてきた。その過程で乾燥材の重要性を認識してきた。
- ・ 全てを天乾で調達するのは難しい。短時間で問題の少ない人乾技術の開発が進んでいる。
- ・ 天乾2ヵ月＋人乾2週間でまわしている。初期乾燥は天乾であるべきでは。
- ・ 天乾でいきたいが、緊急時に「葉枯らし」では対応できない。次善の策としての天然乾燥を研究し始めている。備蓄が出来れば・・・。

木材備蓄

- ・ 各産地で、何棟分かずつでもストックすることを始める。市町村で買い取る？行政の資金支援を。地域ごとに分担して、循環させる。
- ・ 使って、補充して、を繰り返す。部材の規格化も必要。
- ・ 廃校の校舎など、既存の活用されていない空間をストックヤードに。
- ・ 備蓄にはリスクが伴う。6m材が時間を経てねじれ、両端をカットして5mになってしまうなど。賞味期限と消費期限・・・
- ・ 木材関係者は、「できるだけ早く次の人に渡したい！」という意識がある。

建築士の職能

- ・ 発災前／発災直後／発災後の三段階
- ・ 発災前：耐震診断、耐震改修、簡易耐震技術開発、先行高地移転（こうのすまい）
- ・ 発災直後：応急危険度判定（二次災害の防止）
- ・ 発災後：応急仮設住宅、復興住宅
- ・ 耐震診断をしても、お金の問題で結局改修まで至らないケースがほとんど。
- ・ 設計者の多くは、自分のスキルをどこかで活かしたいと思っているが、「どこでどう活かせばよいのかわからない」人がほとんど。

- ・ 行政は、そんな設計者を、何かあったときに「使える」ように把握しておいてもらうことも重要。そうできるような関係を構築しておきたい。

事前に建てること

- ・ 発災後の応急仮設の「前に」建てておきたい。県産材を使用して産業活性化を。
- ・ 「このすまい」など、地域の職人を育てる。建設のみにとどまらず、維持、管理ほか、地域の住民とともに考えておくことが重要。普段の利用、若者を呼ぶしくみ、シェアハウスなど、プロジェクトを実現させるためのソフト面での研究が必要。さらなる理論武装と、やはり材料供給のしくみを。

徳島県木の家づくり協会（TS ウッドハウス、那賀川すぎ共販他）

- ・ 東北での支援で終わらないように。
- ・ 経験を活かして徳島でも事前に備えを。実績ある二戸一での計画の展開を加盟五社で行い、カタログを製作した。
- ・ 仮設期の後は、解体、合体して、復興住宅に利用するなど新たな提案も。

意識

- ・ 防災意識を持ちながら、津波が来るとわかっている場所に「設計」してしまう自己矛盾。
- ・ 建築の意義とは？機能の他にあるものとは？専門知識だけでなく、目に見えない部分の大切さを考えていかなければ。
- ・ 市民の意識にも段階がある。津波最前線でも、「昭和南海地震クラスならば大丈夫な家をつくりたい。それ以上のが来たら仕方がない」という諦観など。
- ・ 覚悟と理解を。
- ・ 若い人は海縁でも、安いところに、逃げることも考えながら建てていく、ということもあるのでは。大きな循環を考える。危険なところで、あえて周囲の人といろいろと「考えておく」ということも重要。

今後

- ・ メーリングリスト作成。本日の参加者からはじめる。
- ・ 建設業協会の赤松会長、事務協←佐藤会長)、学会田口さん、美波町小坂さん、千里さん、野田さん←内野、フレッセ青木さん←日下さん、から、声掛けする。
- ・ 団体を通じてメンバーへ、ではなく、常に一対多でダイレクトにつながりたい。
- ・ 単純に情報共有が目的。それ以上もとめずに、つづけていくことが大事。管理者不要で主従のない、単なるプラットフォーム！！
- ・ 木住協の再生も視野に、県とともに動いていく。